

歴博の近世展示に見る新しいスタイル

久留島 浩

総合研究大学院大学教授 日本歴史研究専攻/人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館教授

国立歴史民俗博物館(以下、歴博)の第3展示室(近世)が、2008年3月18日にリニューアルオープンした。開室以来23年ぶりのことである。新しい研究成果が組み込まれたのはいうまでもなく、それが新しい展示スタイルとしてどのように実現されているのだろうか。

近世をどうとらえるか

歴博の第3展示室(近世)における時代区分は17世紀から19世紀半ばの江戸時代にあたる。国内外での戦争を経験しない状態で幕藩体制という政治体制が200年にわたって続いたという意味では、日本

史上で特異な時代であった。この“平和”な期間に、国内の生産・流通関係は北から南まで広範囲にわたって展開し、各地で独自の地域特性を生みだしつつも、全体としては均質な、“国民的”社会・文化を形成した。とくに現在の県庁所在の6割以上は、近世の都市、なかんづ

く城下町に起因するが、近世を通じた都市の発展にはめざましいものがあり、そこで生み出された諸文化が全国的に展開した。

一方、農村では、都市文化の影響を受けつつ、商品生産の現場としての変化がおこり、そこで蓄積された民富が農村か

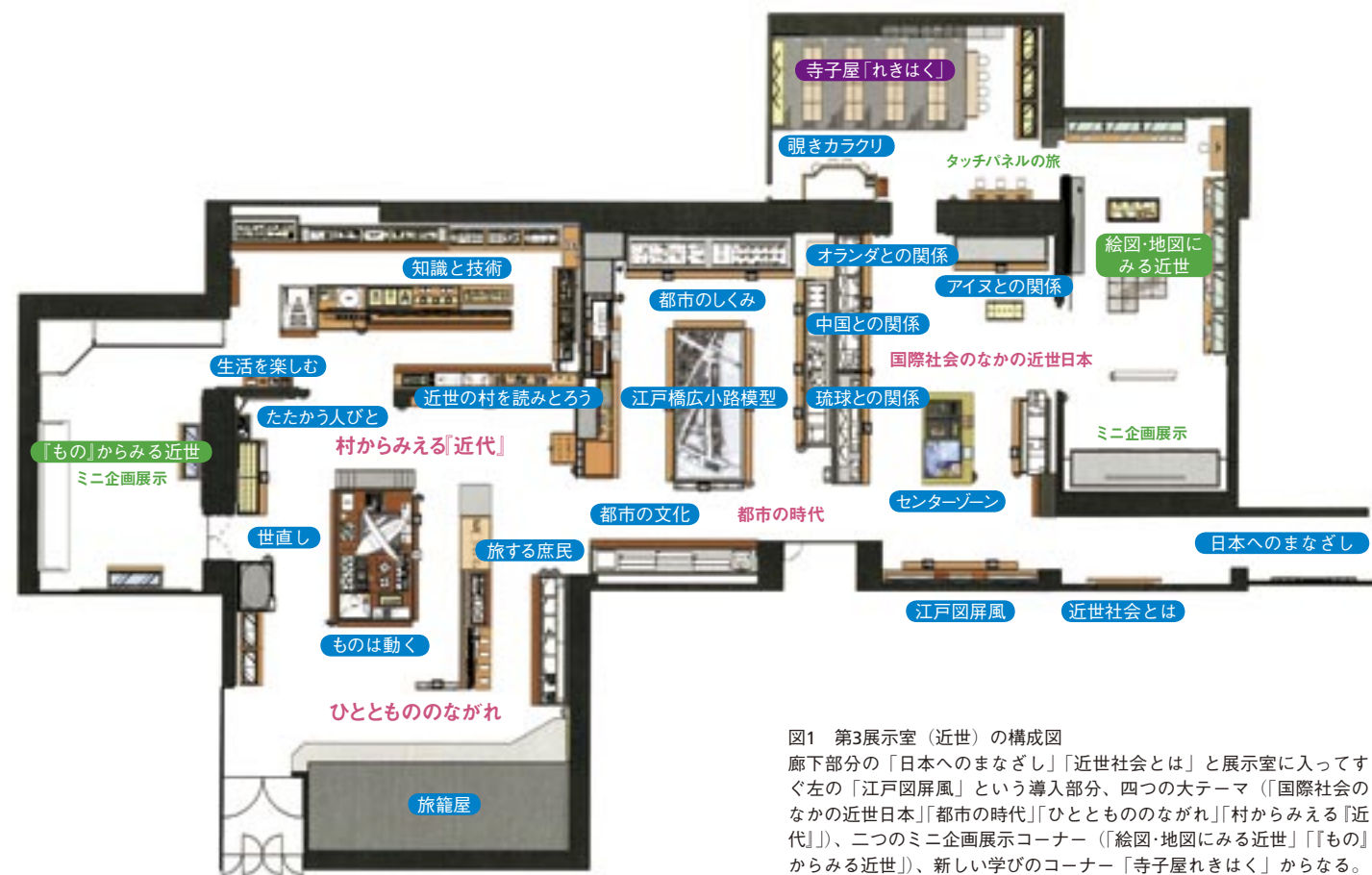


図1 第3展示室(近世)の構成図
廊下部分の「日本へのまなざし」「近世社会とは」と展示室に入ってすぐ左の「江戸図屏風」という導入部分、四つの大テーマ(「国際社会のなかの近世日本」「都市の時代」「ひとつものながれ」「村からみえる「近代」」)、二つのミニ企画展示コーナー(「絵図・地図にみる近世」「もの」からみる近世)、新しい学びのコーナー「寺子屋れきはく」からなる。



図2 (右) 導入部分の「江戸図屏風」。徳川三代将軍家光のころ、17世紀前半に作成されたと考えられる屏風。家光が、寛永9年(1632)、父の大御所秀忠の死去によって名実ともに天下人となったことをきっかけに、寛永11年から12年の間に、松平信綱が家光の上覧に供するために作成させた屏風だとする黒田日出男説が有力である。(左) タッチパネル「歴史にタッチ」のうち、「江戸図屏風」をよむ」という番組である。



らの資本主義化を準備する。こうした町や村に住む庶民たちが経済的・文化的発展の成果を享受するなかで、居住する地域の運営を自らの力で行うだけの政治的能力も獲得するようになる。一方で農村に蓄積された富や地域運営のヘゲモニーをめぐる領主たちとの矛盾も深まるが、近代社会の担い手として成長していくのである。こうしたことが前提となって、日本が西欧社会を模倣しつつも、独自の近代社会を自生する条件・内容が、いわば「内から」形成・準備できたのではないかと考える。

従来、このような自生的な経済発展や独自の文化形成の条件として「鎖国」をとりあげる一方で、日本が科学技術などの面で西欧から遅れた原因を「鎖国」に求めることもあった。今なお、日本の「閉鎖的」な事柄についてしばしば「鎖国的」という形容詞をつけるように、否定的にとらえられることも少なくない。しかし、近世社会は東アジア世界のなかで孤立していたわけではない。実は、寛永期の宗教や貿易に関する幕府の一連の命令は、その当時には「鎖国令」と認識されていたわけではなかった。「鎖国」ということば自体、1801年、元オランダ通詞志築忠雄が、17世紀末にオランダ出島商館医師として来日したケンペルが著した『日本誌』の付録論文を翻訳して「鎖国

論」と名づけたことに始まるが、これとてもすぐに広く使われたわけではない。むしろ、18世紀末以降のロシアなど西欧諸国からの接近に対して、幕府は、「鎖国」を祖先伝来の対外政策だと認識し始めたのである。さらに言うと、幕末の「開国」との対比で、それ以前の対外関係を「鎖国」だと称するようになった。「鎖国」を「祖法」だと言い立てること自体、この時期に世界史のなかに組み込まれることへの抵抗であったのである。逆に言うと、近世を通じて日本は、当時の世界に向かって少なくとも四つの窓口を開いて交流することを対外政策として選択していた。すなわち、長崎口を通じて中国・オランダと貿易を行い、対馬口を通じて朝鮮と、薩摩口を通じて琉球と、また松前口を通じてアイヌと通商関係を持っていたのである(ロナルド・トビ『鎖国』という外交 小学館、日本の歴史9、2008年)。

このようななかで、ロシアに始まる英・米・仏などの本格的なアジアへの登場に対する危機感が、「国民国家」の形成を促進させることになった。それは、先に述べたように、少なくとも地域を運営するクラスの庶民にとっては、国民的な文化や歴史の「発見」あるいは「再発見」をしなければならないという意識として現れる。そのなかで、どのような近代国民国家を構想していくのか、どのような

近代社会を経たのか。日本近代社会(国民国家)の形成をどのように描くかという問題は、歴史学の現代的課題でもある。第3展示室では、「国際社会のなかの近世日本」・「都市の時代」・「ひとつものながれ」・「村からみえる『近代』」という4テーマに分け、この課題に迫ろうとした。

研究と展示の間で

2004年以来、多くの館外研究者の参加を得て展示プロジェクトを組織し、展示構成に関わる調査・研究や議論を重ねてきた。歴史表象(あるいは歴史叙述)の問題として展示を考える研究会(歴博の共同研究「歴史における『異文化』表象の基礎的研究」2005-7)ともリンクさせ、新しい研究成果をいかに新しい展示スタイル、展示理念で表現するかということにも留意した。「国際社会のなかの近世日本」の展示構成を考えるに際しては、長崎・北海道・沖縄など現地の博物館で、地元の研究者と画像資料などを前に議論する機会を設けた。また、近世考古学・民俗学など隣接諸科学との協業を展示の場で実現しようとした。

「いつ来ても新しい発見のある常設展示」

このリニューアルでは、新しい近世史研究の成果を来館者にどのように伝えるか、という点でも留意した。以下、この



歴史が体感できる展示

近年、多くの博物館で体感できる展示が重視されている。ガラスケースのなかの展示物をただ観るだけでなく、可能なかぎり、それが発信している情報を人間の五官で受けとめるという試みである。歴史的な事象は、過去に遡るにつれて、実感することが難しくなりがちだからである。そこで、第3展示室では、「歴史が体験できる展示」を第2のポイントとし、音やにおい・質量などを実感してもらえるような工夫をした。たとえば、幕末に日本を訪れたシーボルトは各地で日本の旋律を集め、それをもとにして『日本の音楽』を作曲（キュフナー編曲）している。観客はその曲を入り口で聞きながら展示室に入ることになる。寺子屋「れきはく」のコーナーには、実際に使われたテキストや双六などの遊具の簡易な複製物を置き、手にとったり、学びや遊びを体験したりできるようにした。時間を越えた事象を理解するためには、こうした体験が必要だと考えるからである。

コミュニケーションの場としての常設展示

第3に、来観者と展示物との間でコミュニケーションが生まれるような工夫をした。観客が、展示物をじっくり観て、展示物が発信しているさまざまな情報（それをつくったり、使ったりした人たちの思いや生活などを含めて）を自らの力で読み取る（歴史と対話する）ことができれば、と思う。展示ケースの前の手すりは、そのための「トレーニング場」でもあると考えている。さらに、これからの博物館の展示の場で必要なのは、このような(1)来観者と展示物との間で繰り返し広げられるコミュニケーションのほかに、(2)展示した側とそれを観る側とが、実際に展示された物をはさんで行うコミュニケーション、(3)展示を観る者同士の間で生まれるコミュニケーションだと考える。(1)はギャラリートークなどが、(2)は寺子屋「れきはく」でのボランティアスタッフと来観者との対話や親子クイズなどがそのきっかけになるのではないかと。豊かなコ



図4 寺子屋「れきはく」。現在は、歴博友の会会員のなかのボランティア登録者に、来館者の学びや遊びの手助けをしていただいている。ボランティアの方にとっても生涯学習の場であってほしいと、毎月「れきはく講座」を開催している。

ミュニケーションによって、観客が展示から感動を得るきっかけがつけられる。

研究者の意図を伝えるには？

では、展示を考案したわたしたちの意図は、観客にうまく伝わっているのだろうか。残念ながらこの点では、今後の本格的な観客調査を待たなければならぬ。このリニューアルでは、「国際社会のなかの近世日本」の一部をあらかじめつくって観客に見せ、「形成途上評価」を実施した。調査結果から、手すりを設けてコミュニケーションをうながすことが有効であることは実証できたし、解説パネルなどにもその成果を生かすことができた。しかし、リニューアル後に大学生たちに試みた調査によれば、解説パネルも含めて、展示をみただけでは十分理解できていないことがわかった。ギャラリートークやガイドレシーバーを聞いて少しわかり、それから自分で解説やタッチパネルを使って初めて理解できたというケースも多かった。耳から情報を入れながら展示を観ることがもっとも合理的なことであろうか。あるいは、結局人が直接解説するのがもっとも有効なことであろうか。

このように、リニューアルオープンしたものの、改善すべき課題は多い。観客調査の結果を生かし、観客の視点にたった展示を実現するとともに、体験コー

ナー・複数の音声ガイドシステム・複数の解説パネル・ギャラリートークの制度化・ボランティアガイドシステムの構築などをはじめとしたさまざまな見学プログラムを充実させることで、生涯学習時代に適合した、観客に応じたきめ細かい対応のできる新しい歴史民俗系博物館モデルを模索し続けることが必要である。それは、最新の研究成果を、一般の来館者に、できるだけ早く、内容豊かに伝えるために、博物館を持つ大学共同利用機関に課された、大きな、しかしやりがいのある課題だと思う。



久留島 浩（くろしま・ひろし）
専門は日本近世史で、村落史、とくに江戸幕府直轄地（幕領）の研究のほか、近世社会の儀礼・祭礼にも興味がある。歴博に来てからは、表象論の観点から歴史系博物館における歴史展示のあり方を考えたり、教育・学習プログラムの開発など博物館における学びのあり方について考えたりする時間が多かった。



図3 (上) 大テーマ「国際社会のなかの近世日本」の展示風景。手前の大テーマパネルには、日本語解説のほかに、英語・中国語・朝鮮語の解説を付した。向かって右が「朝鮮との関係」、正面右が「アイヌとの関係」、左奥が長崎における「中国との関係」「オランダとの関係」、手前左が「琉球との関係」である。
(下) シーボルト自筆の「日本序曲」の楽譜 (Siebold Family Archives, Burg Brandenstein / Germany)。

そが、今後の博物館にとって不可欠である。解説パネルは、いったん作成すると容易に改変できない。当初のストーリーをこわさずに展示替えできるような豊富な収蔵品を持っている博物館は決して多くない。歴史展示は、単線の動線に陥りがちで、来館者は常設展示を繰り返し観ることは少ないのである。そこで、今回のリニューアルでは、観客と展示物とのコミュニケーションをいかに豊かで多様なものにすることに心をくいだいた。たとえば、江戸戸屏風の精巧なデジタル複製を可能な限りの照度のなかで、ガラスケースから出して、間近で観ることができるようにした。各展示ケースの前にはかならず30センチ程度の手すりを設け、そのうえには、タッチパネル式コンピューター約30台を設置した。それに約90番組を組み込み、歴史的情報を大量にかつ多様に提供しようとした。同時に手すりには、一枚ものの見所解説パネルや、屏風や絵巻物などから注目すべき場面をとり

あげて詳細に解説しためくり式解説シートも置いた。これらを活用すれば、観客が自らの興味に応じて、詳しい情報を得ることができるだけでなく、自分ならではの展示の読み方を獲得できるのではないかと期待している。また、複数動線を観客に提供することにもなるのではないかと。さらに、これらを経験した多くの人びとが歴史系博物館を楽しむ術（博物館リテラシー）を獲得していただければと思う。なお、わたしたちは、古文書・絵地図・絵画・衣装・楽器・什器など豊富な近世資料をより多くの方に観ていただく機会を増やしたいと考え、「絵図・地図にみる近世」「『もの』からみる近世」の二つの副室を使って、年に数回の「ミニ企画展示」を計画している。後者では、「海を渡った漆器」「西洋医学発祥の地—佐倉順天堂—」「伝説の朝顔—館蔵資料にみる朝顔文化—」を展示してきた。今後も、研究速報展示も含め、いつまでも新しい総合展示をめざすつもりである。

点について紹介したい。

第一は、「いつ来ても新しい発見のある常設展示」である。多くの博物館では、来観者を増やすような企画展示が求められる、予算のかかる大規模な常設展示のリニューアルは難しい。しかし、予算をかけずに、来館者にとっていつ来ても新しい発見のある常設展示をつくることこ